

彼は私の手を引いて、またリビングに戻って来る。二人で全裸のままウロウロしているのが結構シニールだが、人に言えない悪い事をして
いるような感覚を覚える。彼が座り、おとなのおもちゃ箱を持ち上げ中身を取り出して言った。

「これなんて…どうかな？ 一番気になったんだ」

それは奇妙な形をしていた。なにか宇宙船のような近未来感のある流線形で、美顔器のリフターのようにもみえる。色は黒でマットな感じ
の表面だった。美顔器風の胴体からカタツムリの頭のようなステイックが突き出ているが、どんな風に使うのか想像もつかなかった。彼もお
もちやの使い方が分からないように、箱の中にあった説明書を読んでいる。

私が箱を取り上げて見た。それはクリトリス吸引式バイブというものらしい。ドイツ製らしく、私のイメージするおもちゃとは全く違う感
じで、なによりその値段にびっくりした。

これ…三万円もするんだ…。彼は他にも買いこんでたけど、いったい、いくら使ったんだろ？

「あの、説明書を見せてもらってもいいですか？」

「はい」

彼が渡してくれた説明書を見る。なんかエッチをしていると言うのに、説明書を読んでいるという不思議な構図になってしまった。

なになに…

『Gスポットバイブ×クリトリス吸引の組み合わせが楽しめます。吸引とバイブはそれぞれ十四段階の強弱レベルからお好きな感覚を選べま
す。電源を押し吸引口にクリトリスをあてると自動で連続吸引がスタートします。電源を落としてもいきなり切れずに、ゆっくりとレベルを
落とします。GスポットバイブはGスポットにしっかりあたるように設計されており、太さも確保されておりますので充足感が得られます』

えっ…なにこれ。なんか凄そう。

他にもいろいろ、まるで家電製品のようにしっかりと説明書きがしてあった。あまりにも大量に書いてあるので、読むのも一苦労だと思う。私も途中で読んで彼に渡した。

「凄くいっぱい書いてありますね？」

「ああ、俺もう全部覚えました」

「えっ！ 全部？ あのちよつとの時間で？」

「得意なんです」

ちよつとびっくりしてしまった。長々と書いてある説明書を全部覚えたい。そしてスイッチを入れると、静かなモーター音が鳴り管の方が振動する。

「こんな感じみたいです」

そう言って渡してくるので、私が掴むと振動が伝わって来る。それだけで期待感が膨らみ、私の子宮がキュン♡となった。

これが中に入るんだ…

「そしてこれが、吸引ですね」

彼がスイッチを入れるとポコポコと音がする。それだけだと、どんな感じなのか全くわからなかった。だが、それをいきなり使われる事に一抹の不安を感じて彼に言う。

「あの…出来れば、痛いと嫌なので濡らしてから使ってほしいんです」

「あ…それなら！」

彼がガサゴソと髪袋からはみがきチューブのようなものを取り出して渡してくる。その表面は英語表記だが、裏面を見ると挿入時の潤滑剤やクリトリスに塗布して使ってくださいと書いてあった。

「これってどうなんですかね？」

そう言っただけはくるとふたを開け、チューブからゆつと手に出してこする。

「うっわ。つるつるです」

彼が手を出して来たので、手を握るとつるつるでめちやくちや滑りが良かった。

「なにこれ！ つるつる！」

すると彼が注意書きを読みだす。

「えっと。さらさらとしたオイルベースローションで長時間うるおいをキープ。グリセリン、パラベン、香料を使っておりません。99.8パーセントがオーガニック成分ですので安心して使っていただけます。だそうです」

エッチをしようという際中なのに勉強しているみたいで、なんか少し面白くなってきてしまう。

「ふふっ。もしかして…すっごい真面目さんですね？」

「あ、すみません。会社でも堅物なんて言われてます」

「そう言われるのもわかります。あ！ 悪い意味じゃないですよ」

私が彼にスツともたれかかると、彼は私をソファーに押し倒した。

「なんかさつきは焦っちゃってごめんなさい。もう少しゆっくりします」

そう言って彼が手にローションを出して、私のお腹に手を乗せて滑らせてくる。くすぐったいような感覚だったが、そのまましゅるりと乳房を撫でられた。

「あ…」

彼が乳房をクルクルと撫でながら乳首をくりゅつと弾く。それを何度も何度もくりかえし始めた。

ぴちやつ♡ しゅりゅつ♡ しゅる♡

「ああ…気持ちいいです」

「よかった」

ぬるぬるになった事で、めちやくちや気持ちよくなった。乳首がぴんつと立ってしまっているのが自分でもわかる。滑りの良さがとても心地よくて、軽く鳥肌が立って来た。

「ん♡ はあ♡」

私が声を出すと、彼はゆっくりと片手を下腹部に下ろしていく。つるつるだし、それだけでぞわぞわ来るような感覚に襲われた。彼はもつと手にローションを取って、ぴちよぴちよにして体をまさぐり出す。

「気持ちいいです…」

「よかった。俺、気持ちよくさせられてるんですね？」

「はい♡」

そのままぬるぬるの手が下腹部におりて、私のおまんこをまさぐり始めた。つるつるの手がおまんこを前後にこすり、それが余計に敏感に感じるようになっていく。つるつるなのがこんなに気持ちいいなんて思わなかった。

びちよ♡ ぴちや♡ びちや♡ ぬるっ♡ にゆるる♡

「ああ。良くなってきました…♡ ん♡ んはっ♡」

「声が…かわいいですね」

だって…かわいくしてるもん。

そのつるつるの指先がクリトリスに伸びて、なめらかにクリトリスを撫でまわす。

「うあっ♡ いい♡ とてもいいです♡ ああ♡」

ちゆる♡ ぴちや♡ ぬりゅっ♡ びちよ♡

ローションの音なのか私の愛液なのか分からないが、おまんこをこすられるたびにいやらしい音がした。するとつるつるの指が、するんっ！ と私の膣の中に入ってくる。つるつる過ぎて抵抗がないぶん、簡単に入っちゃうようだ。

「あんっ♡ いいです♡ 気持ちいい♡」

ソファアーの上に寝ている私は、まな板にあげられた魚のようになっていて、彼はまるでピアノでも弾くように横から私の体をまさぐった。